令和３年度「身近なデータサイエンス実践プログラム」自己点検・評価報告書

令和４年７月 11 日
大阪大谷大学 内部質保証推進委員会

1. 点検・評価の実施

大阪大谷大学における数理・データサイエンス・AI 教育プログラム「身近なデータサイエンス実践プログラム」について、プログラムおよび構成される授業科目を対象として、令和３年度に協議会において設立が決定した「情報教育の在り方検討タスクフォース」が自己点検・評価を行い、令和４年５月９日にとりまとめた。その結果を「大阪大谷大学内部質保証に関する規程」に基づき、大学自己点検・評価委員会が検証し、内部質保証推進委員会が評価を行なった。

2. 点検・評価の対象

本学における「身近なデータサイエンス実践プログラム」について、「履修・修得状況」、「学修成果」、「学生による授業評価アンケート」「シラバス」等を材料とし、令和３年度における本プログラムおよびプログラムを構成する授業科目について、点検・評価を行なった。

3. 点検・評価の判定

「情報教育の在り方検討タスクフォース」において行われた自己点検・評価に基づき、大学自己点検・評価委員会が判定を行なった。

・評価レベル

A：十分適正に行われており、優れた点がある
B：おおむね適正に行われており、問題がない
C：改善の必要がある

4. 大学自己点検・評価委員会および内部質保証推進委員会による評価結果

評価レベル：B

令和３年度における本プログラムについては、おおむね適正に行われていると判定する。ただし、授業方法等について令和４年度に改善し、継続的な点検・評価を実施することを求める。

5. 情報教育の在り方検討タスクフォースによる自己点検・評価結果

(1) 授業科目の点検・評価

点検項目	点検結果	評価結果
1-1. 学生・教員が学修効果・教育効果を確認できるようにしているか。	プログラムを構成する「コンピュータ技術基礎Ⅰ」(文学部・教育学部・人間社会学部)、「情報薬学基礎演習」(薬学部)においては、LMS により課題提出のほか、成績管理が行なわれている。LMS を通じて、教員は教育効果を把握することが可能であるほか、学生も自身の学修効果を随時確認することができる。	LMS を通じて、学生は自身の学修効果を、教員が教育効果をそれぞれ確認できるようになっていると判断できる。 評価レベル：B
1-2. プログラムを構成する授業科目の「到達目標」「成績評価方法」等をシラバスに記載しているか。	本学では、シラバスへの記載に関する要項が定められており、学修成果に関わる部分については、記載内容や記述方法の基準がある。 「コンピュータ技術基礎Ⅰ」、「情報薬学基礎演習」いずれにおいても、授業内容や学修成果の把握等に関して、対象学科や担当教員によらない共通シラバスを定めており、かつ到達目標や評価方法・評価基準等は、上記要項に即した形で記載されている。	対象学科や担当教員によらないシラバスの共通項目が定められており、かつ、その内容は本学のシラバス記載要項に即していると判断できる。 評価レベル：B
1-3. 各授業科目のシラバスであらかじめ開示した成績評価基準に基づき成績評価を行っているか。	シラバスにおいて、成績評価に寄与する課題や平常点等の比率を明記しているほか、到達目標に基づいた成績評価基準も記載されている。そして各授業科目においては、それに基づいて成績評価が行われている。	シラバスに記載された成績評価基準に基づき、成績評価が行われていると判断できる。 評価レベル：B
1-4. 学修成果の評価に用いた課題・問題等の文書は学生・教員が閲覧可能な状態で保存されているか。	大学の方針として、成績評価に関与する提出物等については、紙媒体もしくはデジタルデータの形式で、学部ごとに 4 年または 6 年の保管が義務付けられている。 この方針のもと、各授業科目において学修成果の評価に用いた提出物については、LMS を活用しており、提出物およびその評価・フィードバックコメント等は教員・学生それぞれで閲覧可能な状況で保存されている。	学修成果の評価に用いた課題に関する各種資料は適切に LMS に保存されており、学生・教員双方が常に閲覧可能な状況であると判断できる。 評価レベル：B

1-5. 学修成果の評価に用いた課題の答案等はできるだけ返却しているか。	プログラムを構成する各授業科目において、LMS 上で課題の出題・提出受付のほか、採点・フィードバックを行なっている。メッセージング機能を用いたグループ単位のフィードバックも行っている。	LMS 上での教員・学生間のやりとりから、学生は自身の答案等を常に閲覧できる状態にあり、適切に返却できていると判断できる。 評価レベル：B
1-6. 授業内容について、事後の点検・評価を行い、次年度に向けた改善活動につなげているか。	「情報教育の在り方検討タスクフォース」により、本プログラムならびに授業科目について詳細な検討が行われた。令和 3 年度において、授業外の学習時間を調整して 23 コマで 2 単位相当としていた授業計画については、当タスクフォースで再検討が行われ、授業内容を大きく変えることなく、他の授業と同様に 15 コマで 2 単位に集約され、令和 4 年度より実施されることとなった。	授業内容について、点検・評価が行われ、その結果が翌年度の授業計画の改善に資することができていると判断できる。 評価レベル：A

(2) プログラムの点検・評価

点検項目	点検結果	評価結果
2-1. プログラムが、本学の建学の精神、教育理念等と関係付けて設置されているか。	建学の精神「報恩感謝」および教育理念「自立・創造・共生」によれば、本学での学びが社会の発展に寄与することが期待されている。一方、各学科のディプロマ・ポリシーによれば、全学生には「幅広い教養」を身につけることが求められている。今後のデータ駆動型社会の到来に向けて、数理・データサイエンス・AI のリテラシーを持つ人材の育成は極めて重要であり、本プログラムおよび授業科目は、建学の精神、教育理念、ディプロマ・ポリシーに十分合致する。	建学の精神、教育理念、各学科のディプロマ・ポリシーと合致していることから、基準を満たしていると判断できる。 評価レベル：B
2-2. プログラムの履修・修得状況・学修成果を確認できているか。	プログラムは、全学部の学生にとっては 1 科目から構成されるため、当該授業科目の履修者・修得者がプログラムの履修者・修了者となる。令和 3 年度のプログラムの履修状況は、履修者数が 610 名で、うち修了者が 544 名、修了率は 89.2%である。なお、	プログラムの履修・修得状況、ならびに学修成果を確認できていると判断できる。 評価レベル：B

	いずれの科目も対象学科の必修科目として位置づけられるため、履修率は 100%である。 成績分布については、「秀」24.4%、「優」29.2%、「良」20.8%、「可」14.8%であった。	
2-3. 学生による授業評価アンケートに基づく学生の理解度を確認できているか。	令和 3 年 7 月に実施した、学生による授業評価アンケートにおいて、5 件法による満足度および理解度（知識・教養等の獲得）の２項目の回答結果に注目したところ、満足度の平均値が 4.35、理解度の平均値が 4.39 であり、いずれもそれぞれの大学全体の平均 4.20、4.28 を上回っている。	プログラムとして、学生への理解や満足が与えられていると判断できる。 評価レベル：B
2-4. プログラムが示すモデルカリキュラムとの対応を確認できているか。	本プログラムを構成する授業科目の令和 3 年度シラバスを確認し、モデルカリキュラムの必須項目である「導入」「基礎」「心得」をカバーしている。	シラバスとモデルカリキュラムの対応を確認し、「導入」「基礎」「心得」の内容が盛り込まれていると判断できる。 評価レベル：B
2-5. プログラム修了者の進路・活躍状況を確認できているか。	プログラムは令和 3 年度入学生より開始しており、プログラム修了者の進路・活躍状況を確認できる段階にはない。	
2-6. プログラムの点検・評価結果をインターネット等を通じて公開しているか。	プログラムの点検・評価を、令和 3 年度よりスタートさせ、本報告書が大学自己点検・評価委員会および内部質保証推進委員会において承認が得られれば、内部質保証推進委員会における評価結果と合わせ、インターネットを通じて公開する予定である。	プログラムの点検・評価を実施し、その結果を大学 Web サイトを通じて広く社会に公開しているものと判断できる。 評価レベル：B

以上